

中学生の未来展望と被受容感の関連

山外 佑紀・島谷 まき子

Future time perspective of junior high school students and the perception of being accepted

Yuki YAMAHOKA and Makiko SHIMATANI

The experience of future time perspective in junior high school students and its relationship to the perception of being accepted by their parents, friends and teachers was investigated. First, the Future Time perspective Scale was developed based on free description of junior high school students about future time perspective, the No Course Decision Scale (Shimizu, 1990), and the Experiential Time Perspective Scale (Shirai, 1994). Results of using this scale with Junior high school students indicated the following. Students with the perception of being accepted by their parents, friends, and teachers had an optimal future time perspective, whereas students with the perception of being accepted by two of them tended to have an optimal future time perspective.

Key words : future time perspective (未来展望), perception of being accepted (被受容感), junior high school students (中学生)

問題と目的

問題

文部科学省の中学校学習指導要領(2003)の総則には、中学生が自分の未来について考え、生きていく力を身につけることの必要性が指摘されている。Erikson, E.H. (1959)によると、青年期の最も重要な心理社会的発達課題は、いかにしてアイデンティティを確立していくかという点にある。杉山(1996)は、現在が過去に根ざし過去の上に現在の自分が築き上げられているというアイデンティティ感覚の上に立って、未来がはっきりと具体性をもって現実的なものとなると述べている。この観点から、青年期に過去・現在・未来の時間的展望のもとに、これからの自分の未来展望を描くことは、アイデンティティ形成の一側面と考えることもでき(比嘉・岡本, 2007)、義務教育を終える中学生にとって、卒業後の自分の進路・生き方について考え、希望をもち、未来展望を描くことは重要な課題であるといえる。

中学生の未来展望については、かなりファンタジックで漠然とした内容を未来展望と捉えている研究(飛永, 2007)がある一方、中学生の意識に沿わない具体的で詳細なキャリア成熟に焦点を当てた研究(神谷, 1982)がみられ、中学生の実態に即した未来展望の明確な把握はできていない。また、時間的展望の一つである未来展望を捉えるにあたっては、過去・現在の流れの中で検討することが必要であると考えられる(白井, 2001)。さらに、未来を考える上で、Zaleski, Z. (1996)は「未来不安」の概念を導入しており、未来展望を描くにあたって様々な感情が伴うことも示唆される。そこで本研究では、未来展望を「過去から現在という流れの中での自分の未来に対する希望、ならびに人生目標や生き方についての大まかな見通しと、それに伴う感情」と定義し、中学生がどのような未来展望をもっているのかを実態に即して把握する。

未来展望に関連する要因の研究として、比嘉・岡本(2007)は、大学生を対象に未来展望と重要

な他者との信頼感の関連についての検討を行い、その結果、将来への希望は自己への信頼と、将来目標は他者への信頼と相関が高いことが明らかになり、重要な他者への信頼感が未来展望の土台となっていることが示唆された。また天貝（1999）は、親だけではなく身近な他者からの受容経験や承認経験などをコアとして、信頼感が形成されることを指摘している。以上のことから、信頼感の形成要因としての他者からの受容経験・承認経験は、未来展望と関連していることが推察される。さらに、松井・奈良井（2001）は、進学先の選択・決定や人生への取り組み姿勢において、周囲からの「承認」を得ている中学生の方がその程度が高いということを明らかにし、周囲からの「承認」が中学生の進路選択に対する自己効力を高めるファクターになりうると示唆している。これらの結果から、中学生の未来展望を考えるにあたり、重要な他者から受け入れられ承認されている感覚に着目して未来展望との関連を検討することによって、中学生の未来展望の背景にある周囲との関係がより明らかになり、周囲のサポートのあり方について示唆を得られると考えられる。杉山（2002）は、自分が他者から一定のあたたかさや承認をもって大切に扱われている認識を被受容感としている。本研究では、重要な他者から受け入れられ承認されている感覚を被受容感として捉えることとする。

目 的

本研究では、中学生がどのような未来展望をもっているか、その実態を中学生の意識に沿って把握し、中学生にとって重要な他者であると考えられる親・友人・教師からの被受容感と未来展望との関連を検討することを目的とする。まず、研究Ⅰでは中学生の未来展望の実態を把握し、それをもとに未来展望尺度を作成する。研究Ⅱでは、研究Ⅰで作成した未来展望尺度を使用し、中学生の未来展望と被受容感の関連を検討する。

研究Ⅰ

目 的

中学生の未来展望の実態を中学生の意識に沿って把握し、それをもとに未来展望尺度を作成する。

方 法

調査対象者 中学1年生17名（男子8名、女子9名）、中学2年生23名（男子12名、女子11名）、中学3年生21名（男子5名、女子16名）の計61名。

調査時期と手続き 調査は2009年6～7月に、質問紙を学習塾で講師を通じて配布し、その場で回答してもらった。その際、回答するかどうかは自由に決めてよいこと、回答が他人に知られたり個人が特定されることはないということをフェイスシートで説明した。回答後の質問紙は、一人ひとり封筒に入れ封をしてもらって回収した。

質問紙の内容 フェイスシート（学年・性別）に加え、進路成熟度尺度（坂柳, 1992）と飛永（2007）における未来展望の定義を参考にし、「中学卒業後」「高校卒業後」「将来の職業」「これからの将来」についてどのような目標や希望を描いているかなど、未来展望に関する質問計21項目を作成し、自由記述式（一部選択式）で回答を求めた。

結果と考察

中学生の未来展望についての回答結果「中学卒業後」の進路については、ほとんどの中学生が進学を希望しており、将来の夢や目標とする職業に向けて、進学先を考えたり自分なりに調べたり親や先生に相談をしていた。また、進路実現に向けて、具体的な目標を立てたり実際に何かに取り組んでいた。そして、「中学卒業後」は充実した生活をしているといった回答も多かった。これらの結果は、「中学卒業後」はより身近な未来であるため未来展望を描きやすいことや、中学入学後から行われる進路指導の成果といえるだろう。一方、「高校卒業後」および「将来の職業」については、自分なりの将来目標があって進学・就職を希望している者や、まだ先のことだからわからないといった者がいた。これらは中学生にとって先の未来であるため、考えられる者と考えられない者と二分したものと考えられる。また目標とする職業がある者は、情報を収集したり先生に相談したりしており、目標に向けた行動をとりやすいたことが示唆された。「これからの将来」については、現在の家族と仲良く楽しく暮らしているだろう、親孝行をしているだろうという回答や、新し

い家族とも明るく楽しい家庭を築いているだろうという回答が多く、家族との関係を含めた希望を抱いていることが明らかになった。また、理想とするような人物像をもっていた。

未来展望尺度の作成 これらの自由記述の回答結果に加え、進路決定に伴う感情に着目した清水(1990)の進路不決断尺度と白井(1994)の時間的展望体験尺度を参考にし、計49項目からなる未来展望尺度を作成した(表1)。

この尺度は、「中学卒業後」、「高校卒業後」、「将来の職業」といった時間を追った進路の見通しと、「これからの将来」、「時間的展望」から未来展望を捉えるものである。これらの項目は、中学生から得られた自由記述の回答をもとに作成しているため、進学・就職といった進路に対する考えや行動がより具体的な内容になっている。また、「これからの将来」に関する項目は、飛永(2007)のファンタジックで漠然としたものと比べ、より具体的で現実的なものとなり、中学生の実態に沿った質問項目となった。また、清水(1990)の進路不決断尺度を参考にすることで、これまでの研究では検討されてこなかった進路決定に伴う感情も含めて捉えることができるだろう。さらに、過去・現在・未来という時間の流れの中で未来展望を捉えるために、白井(1994)の時間的展望体験尺度を参考にし、未来展望における時間的展望の側面を捉えることが可能となった。

研究Ⅱ

目的

研究Ⅰで作成した未来展望尺度を用いて中学生の未来展望の実態を把握し、中学生にとって重要な他者であると考えられる親・友人・教師からの被受容感と未来展望との関連を検討する。

方法

調査対象者 A県内の中学校の1年生90名(男子44名、女子46名)、2年生125名(男子65名、女子60名)、3年生106名(男子41名、女子65名)の計321名と、B県内の中学校の1年生157名(男子78名、女子79名)、2年生153名(男子74名、女子79名)、3年生164名(男子71名、女子93名)の計474名、合計795名。

調査時期と手続き 調査は、2009年9～10月に、質問紙を中学校の各クラスにおいて教科担任ならびにクラス担任教諭を通じ配布してもらい、その場で回答してもらった。その際、回答するかどうかは自由に決めてよいこと、回答が他人に知られたり個人が特定されることはないということをフェイスシートで説明した。回答後の質問紙は、一人ひとり封筒に入れ封をしてもらって回収した。

質問紙の構成 (1)フェイスシート：学年と性別を尋ねた。(2)未来展望の測定：研究Ⅰで作成した未来展望尺度を使用し、4件法で尋ねた。(3)被受容感の測定：鈴木・小川(2008)の被受容感尺度を参考に、親・友人・教師それぞれからの被受容感について、各質問21項目について4件法で尋ねた。

結果

中学生の未来展望の実態について(1)未来展望尺度の分析 未来展望尺度の信頼性分析の結果、 α 係数は0.90であり、十分な信頼性(内的一貫性)を有していた。未来展望尺度49項目に対し、主因子法による因子分析を行ったが、49項目の全分散を説明する割合がいずれの場合も低く、因子構造は明らかにならなかった。そのため時間的な意味を考え、表1の未来展望尺度【1】の1～12を「中学卒業後の未来展望」、【2】の13～24を「高校卒業後の未来展望」、【3】の25～36を「職業の未来展望」、【4】の37～42を「希望」、【5】の43～49を「時間的展望」とした。また、内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「中学卒業後の未来展望」は $\alpha = .82$ 、「高校卒業後の未来展望」は $\alpha = .75$ 、「職業の未来展望」は $\alpha = .83$ 、「希望」は $\alpha = .80$ 、「時間的展望」は $\alpha = .51$ という値が得られた。「時間的展望」は十分な値とはいえないが、未来展望尺度全体としては十分な内的整合性を有していること、今回の研究では重要な概念であることから除外せずに分析をすることにした。各1項目あたりの平均値は、「中学卒業後の未来展望」が2.77 ($SD = 6.10$)、「時間的展望」が2.71 ($SD = 3.74$)と4件法の「3：少し当てはまる」に近い値、「高校卒業後の未来展望」が2.56 ($SD = 6.16$)、「職業の未来展望」が2.60 ($SD = 7.15$)

表1 未来展望尺度

【1】 中学卒業後

1. 中学卒業後の進路について考えている。
2. 進路について、本やパンフレット、インターネットなどで調べている。
3. 進路実現に向け、学習面で具体的な目標を立てている。
4. 高校進学はまだ先のことなので、考えていない。(**)
5. 進学の希望はあるが、入学試験が心配である。*
6. 将来の夢があるので、進学を希望している。
7. 就職に必要なので、進学を希望している。
8. 特別やりたいことはないが、皆が行くので進学を希望している。(**)
9. 進路実現のために、自分なりに工夫しながら勉強をしている。
10. 親や先生に、自分の成績で希望する高校に行けるか相談した。
11. もっと学びたいことがあるので、進学を希望している。
12. 中学卒業後は、志望校に合格し充実した生活を送っていると思う。

【2】 高校卒業後

13. 高校卒業後の進路について考えている。
14. 自分の関心や興味がよくわからないので、進路が決まらない。* (**)
15. 高校卒業後の進路について、本やインターネットで調べている。
16. 進路の決定は、運や偶然によって決まることが多い。* (**)
17. 高校卒業後のことは、先のことだからよくわからない。(**)
18. 将来の夢を視野に入れ、進路を考えている。
19. どのようにして進路を決めればよいかわからないので不安である。* (**)
20. 将来つきたい職業を視野に入れ、進路を考えている。
21. 自分の能力や適性がよくわからないので、進路が決まらない。* (**)
22. 希望する進路はあるが、試験が心配である。*
23. 高校卒業後は、将来の夢に向かって頑張っていると思う。
24. 希望する進路はあるが、これが最良なのかどうか不安である。*

【3】 将来の職業

25. 将来就きたい職業がある。
26. 将来の職業について、親や先生にどうすればなれるか相談した。
27. どのようにして将来の職業を決めればよいかわからないので不安である。* (**)
28. 自分の能力や適性がよくわからないので、将来の職業が決まらない。* (**)
29. その職業に就くために、本やインターネットで調べている。
30. 将来の職業を考えているが、採用試験が心配である。*
31. 親や先生に、自分の将来の夢や希望する職業について話した。
32. 将来希望する職業に就くために、勉強をしている。
33. 自分の関心や興味がよくわからないので、将来の職業が決まらない。* (**)
34. 就職後は、仕事を熱心に行っていると思う。
35. どんな仕事があるかわからないので、将来の職業についてはよくわからない。* (**)
36. 将来は、目標とする職業に行っていると思う。

【4】 これからの将来

37. 将来は、今の家族と仲良く楽しい生活をしていると思う。
38. 将来は、自分の趣味を楽しんでいると思う。
39. 将来は結婚し、自分の家庭を持って楽しく過ごしていると思う。
40. 将来は、友達と楽しく過ごしていると思う。
41. 将来は、親孝行をしていると思う。
42. 将来は、自分が理想とする人になっていると思う。

【5】 時間的展望

43. 今の生活に満足している。
44. 過去ことはあまり思い出したくない。
45. 自分の将来は、自分できりひらく自信がある。
46. 今の自分は本当の自分ではないような気がする。
47. 私の将来は漠然としていてつかみどころがない。
48. 私は、自分の過去を受け入れることができる。
49. 私の将来には、希望もてる。

*は清水 (1990) の進路不決断尺度、[時間的展望] は白井 (1994) の時間的展望体験尺度から抜粋
(**) は逆転項目を示す

と4件法の「2：あまり当てはまらない」と「3：少し当てはまる」の中間の値、「希望」が3.04 ($SD = 3.44$) で「3：少しあてはまる」を少し超える値であった。また、「中学卒業後の未来展望」・「高校卒業後の未来展望」・「職業の未来展望」、「希望」、「時間的展望」それぞれの平均値に有意差があるかどうかを検定するために、1要因の分散分析を行ったところ有意であった ($F(6,3540) = 121.25, p < .001$)。多重比較 (Sidak法、5%水準) の結果、「高校卒業後の未来展望」と「職業の未来展望」の間と、「中学卒業後の未来展望」と「時間的展望」の間に有意差はみられなかったが、その他の間には有意差がみられた。つまり、「希望」が最も高く、2番目に「中学卒業後の未来展望」・「時間的展望」、3番目に「高校卒業後の未来展望」・「就職後の未来展望」が高かった。(2) 性差と学年による差 性別と学年を独立変数、「未来展望 (全体)」、「中学卒業後の未来展望」、「高校卒業後の未来展望」、「職業の未来展望」、「希望」、「時間的展望」を従属変数とする分散分析を行ったところ、全てにおいて有意な交互作用はみられなかった。「未来展望 (全体)」、「中学卒業後の未来展望」、「職業の未来展望」、「希望」においては、性別の主効果がみられた ($F(1,585) = 6.50, p < .05$; $F(1,710) = 4.81, p < .05$; $F(1,723) = 15.70, p < .001$; $F(1,615) = 8.19, p < .001$; $F(2,755) = 8.61, p < .001$)、男子よりも女子の方が有意に高かった。また、「未来展望 (全体)」、「中学卒業後の未来展望」、「高校卒業後の未来展望」、「職業の未来展望」、「希望」において、学年の主効果がみられた ($F(2,585) = 17.06, p < .01$; $F(2,710) = 74.18, p < .01$; $F(2,704) = 16.49, p < .001$; $F(2,723) = 3.69, p < .05$; $F(2,615) = 24.08, p < .001$; $F(2,755) = 4.68, p < .05$)。多重比較 (Bonferroni法、5%水準) の結果、「未来展望 (全体)」においては、1年生の平均値が128.21、2年生129.81、3年生139.10で、1年生と2年生の間に有意差はみられなかったが、1年生・2年生より3年生の方が有意に高かった。「中学卒業後の未来展望」においては、1年生の平均値が30.44、2年生32.34、3年生36.60で、1年生より2年生、2年生より3年生の方が有意に高かった。「高校卒業後の未来展望」においては、1年生の平均値が29.75、2年生29.94、3年生32.63で、

1年生・2年生より3年生の方が有意に高かった。「職業の未来展望」においては、1年生の平均値が30.79、2年生30.94、3年生32.44で、1年生より3年生の方が有意に高かった。「希望」においては、1年生の平均値が18.15、2年生17.66、3年生18.65で、2年生より3年生の方が有意に高かった。

被受容感について (1) 被受容感尺度の分析 被受容感尺度の信頼性分析の結果、 α 係数は0.93であり、十分な信頼性 (内的一貫性) を有していた。被受容感尺度21項目に対し主因子法による因子分析を行ったところ、3因子構造が妥当であると考えられるので、3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。因子パターンと因子間相関を表2に示す。なお、3因子で21項目の全分散を説明する割合は67.30%であった。第1因子は教師からの被受容感に関する項目が高い負荷量を示しているため「教師からの被受容感」、第2因子は親からの被受容感に関する項目が高い負荷量を示しているため「親からの被受容感」、第3因子は友人からの被受容感に関する項目が高い負荷量を示しているため「友人からの被受容感」、と命名した。また、内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「親からの被受容感」は $\alpha = .87$ 、「友人からの被受容感」は $\alpha = .88$ 、「教師からの被受容感」は $\alpha = .96$ と十分な値が得られた。1項目あたりの平均値は「親からの被受容感」は3.30 ($SD = 12.69$)、「友人からの被受容感」は3.21 ($SD = 4.79$) で、「3：少し当てはまる」を上回る値であった。「教師からの被受容感」は2.78 ($SD = 5.78$) で、「3：少し当てはまる」に近い値であった。また、「親からの被受容感」、「友人からの被受容感」、「教師からの被受容感」の平均値に有意差があるかどうかを検定するために、1要因の分散分析を行ったところ、有意であった ($F(1,720) = 265.58, p < .001$)。多重比較 (Sidak法、5%水準) の結果、すべての間に有意差がみられた。つまり、「親からの被受容感」が最も高く、2番目に「友人からの被受容感」、3番目に「教師からの被受容感」が高かった。(2) 性差と学年による差 性別と学年を独立変数、「被受容感 (全体)」、「親からの被受容感」、「友人からの被受容感」、「教師からの被受容感」を従属変数とする分

表2 被受容感尺度の因子分析結果 (Promax回転後の因子パターン)

項目内容	教師からの被受容感	親からの被受容感	友人からの被受容感
私は先生から大切にされていると思う。	.93	.03	-.04
私は優しい先生がいて一人ではないと思う。	.93	-.00	-.06
私は先生から理解されていると思う。	.91	.01	.02
私は先生から受け入れられていると思う。	.88	.06	.00
私の考えや感じを先生はわかってくれると思う。	.88	-.03	.02
私は先生とつながっていると思えている。	.87	-.06	.04
先生はあたたかい心で私を迎え入れてくれるように思う。	.84	.02	.05
親はあたたかい心で私を迎え入れてくれるように思う。	-.03	.91	-.02
私は親から大切にされていると思う。	.00	.88	.00
私は親から受け入れられていると思う。	.00	.88	.01
私は優しい親がいて一人ではないと思う。	.02	.87	-.00
私は親から理解されていると思う。	-.01	.80	.07
私は親とつながっていると思えている。	.00	.52	-.02
私の考えや感じを親はわかってくれると思う。	.04	.45	.04
私は友達から理解されていると思う。	-.00	-.03	.89
私は友達とつながっていると思えている。	-.02	-.03	.87
私は友達から大切にされていると思う。	.05	.01	.85
私の考えや感じを友達はわかってくれると思う。	.02	-.04	.83
友達はあたたかい心で私を迎え入れてくれるように思う。	-.03	.06	.82
私は友達から受け入れられていると思う。	.06	.05	.56
私は優しい友達がいて一人ではないと思う。	-.03	.06	.44

散分析を行ったところ、全てにおいて有意な交互作用はみられなかった。「被受容感 (全体)」、「親からの被受容感」、「友人からの被受容感」において、性別の主効果がみられ ($F(1,715) = 9.20, p < .01$; $F(1,754) = 18.61, p < .001$; $F(1,748) = 14.57, p < .001$)、男子よりも女子の方が有意に高かった。また、「被受容感 (全体)」、「親からの被受容感」、「友人からの被受容感」、「教師からの被受容感」全てにおいて、学年の主効果がみられた ($F(1,715) = 6.67, p < .01$; $F(1,754) = 8.28, p < .001$; $F(1,748) = 4.32, p < .05$; $F(2,760) = 5.92, p < .01$)。多重比較 (Bonferroni法、5%水準) の結果、「被受容感 (全体)」は、2年生が1年生・3年生より有意に低かった。「親からの被受容感」は、2年生・3年生より1年生の方が有意に高かった。「友人からの被受容感」と「教師からの被受容感」は、2年生より3年生の方が有意に高かった。

未来展望と被受容感の関連 (1) 未来展望と被受容感の相関 未来展望尺度と被受容感尺度の下

位尺度間の相関係数を表3に示す。「高校卒業後の未来展望」と「教師からの被受容感」の間を除き、「未来展望 (全体)」および各下位尺度と三者からの被受容感の間には、弱い相関から中程度の相関がみられた。(2) 親・友人・教師からの被受容感高群・低群による未来展望の差 親・友人・教師からの被受容感の中央値分割で行うと (3) において各群のバラつきが大きく、さらに「高校卒業の未来展望」の分散分析の結果が有意ではないため平均値を基準として、親・友人・教師からの被受容感を高群と低群に分類した。そして、親・友人・教師からの被受容感高群・低群間の「未来展望 (全体)」および各下位尺度の平均値の有意差を確かめるため、t検定を行った。その結果、「未来展望 (全体)」および各下位尺度において、親・友人・教師からの被受容感高群の方が低群より有意に高かった。(3) 被受容感が未来展望に及ぼす影響 親・友人・教師からの被受容感の高群・低群を組み合わせ、「親・友人・教

表3 未来展望尺度と被受容感尺度の相関係数

	被受容感(全体)	親からの被受容感	友人からの被受容	教師からの被受容感
未来展望(全体)	.38**	.33**	.38**	.25**
中学卒業後の未来展望	.31**	.27**	.31**	.22**
高校卒業後の未来展望	.13**	.10*	.16**	.06
職業の未来展望	.22**	.16**	.21**	.16**
希望	.49**	.53**	.46**	.25**
時間的展望	.48**	.42**	.46**	.34**

** $p < .01$ * $p < .05$

師ともに高群」「教師のみ低群」「友人のみ低群」「親のみ低群」「親のみ高群」「友人のみ高群」「教師のみ高群」「親・友人・教師ともに低群」の8つの群に分類した。そして、8つの群を独立変数、「未来展望(全体)」および各下位尺度を従属変数とする三要因の分散分析では結果が複雑になり、考察が困難になるため一要因で行っています。表4に8群の各得点とF値ならびに多重比較の結果を示す。

考察

中学生の未来展望の実態について 未来展望全体の1項目あたりの平均値より、中学生は少し未来展望をもっていた。「希望」は平均値が最も高く、2番目に「中学卒業後の未来展望」「時間的展望」、3番目に「高校卒業後の未来展望」「職業の未来展望」が高かった。また、「高校卒業後の未来展望」と「時間的展望」以外の全ての未来展望の下位尺度において男子より女子の方が高かった。この未来展望における性差は、発達の性差が関連していると考えられる。望月・斉藤(1992)は、個人のキャリア発達が身体的・情緒的・精神的などの領域の発達と関連していることを示唆しており、中学生期は、女子の方が身体的・情緒的・精神的にも発達が早いことから、未来展望においても性差が生じたと考えられる。さらに、「未来展望(全体)」は1年生・2年生より3年生のほうが高く、「中学卒業後の未来展望」は学年が上がるにつれて高くなり、「高校卒業後の未来展望」は1年生・2年生よりも3年生が、「職業の未来展望」は1年生よりも3年生が、「希望」は2年生よりも3年生が高いという結果が得られた。このような結果は、松井・奈良井(2001)の

研究でも明らかになっており、中学校において進路指導を実践してきた成果であると指摘されている。また、3年生は中学卒業までの時間も短く、卒業後の進路を含めた今後の人生について考える機会が増えていることも考えられるだろう。以上のように、中学生は少し未来展望をもっており、特に将来に対して「希望」を抱き、より近い未来の方が未来展望を描きやすいことが明らかになった。また、女子の方が男子より未来展望をもっており、学年が上がって発達していくとともに未来展望は高まるということが明らかになった。財団法人日本青少年研究所(2001)は日本・韓国・アメリカ・フランスの13~18歳の男女に対し、21世紀はどのようなものかという質問をしたところ、アメリカの中高生は明るい未来を描いている一方、日本の中高生は悲観的であったとしている。さらに、日本、アメリカ、中国の高校生の未来意識に対する調査では、現在もっている希望(夢)は何かという質問に対し「特になし」と答えた高校生が、アメリカ0.3%、中国0.7%であるのに対し、日本は1.5%であった(財団法人日本青年研究所, 2002)。しかし、本調査において中学生は将来の自分や家族を含めた「希望」を抱いていて、将来に対してもある程度は未来展望をもっていることが明らかになっており、これまでの研究結果とは異なる結果が得られた。このような結果は、調査方法や調査時期も大きく影響していることが考えられるため、今後国際比較も含めた詳細な検討が必要だと考えられる。

被受容感について 「被受容感(全体)」・「親からの被受容感」・「友人からの被受容感」の平均値より、中学生はある程度周囲から受容されていると感じていた。「親からの被受容感」が最も高

表4 未来展望（全体）および各下位尺度の各群の平均値とF値および多重比較の結果

	群	度数	1項目あたりの平均値	標準偏差	F値	多重比較
未来展望（全体）	①親・友人・教師ともに高群	168	2.87	18.51	13.53* (7,545)	①>⑦⑧
	②教師のみ低群	42	2.84	17.65		②③④>⑧
	③友人のみ低群	58	2.72	19.42		
	④親のみ低群	34	2.75	20.28		
	⑤親のみ高群	39	2.66	17.89		
	⑥友人のみ高群	21	2.61	20.29		
	⑦教師のみ高群	73	2.63	18.92		
	⑧親・友人・教師ともに低群	118	2.45	17.55		
中学卒業後の未来展望	①親・友人・教師ともに高群	193	2.93	5.82	9.00** (7,646)	①>⑦⑧
	②教師のみ低群	49	2.91	5.93		②③④>⑧
	③友人のみ低群	66	2.85	5.89		
	④親のみ低群	43	2.89	5.98		
	⑤親のみ高群	47	2.72	5.51		
	⑥友人のみ高群	27	2.74	7.50		
	⑦教師のみ高群	84	2.70	5.34		
	⑧親・友人・教師ともに低群	145	2.51	6.11		
高校卒業後の未来展望	①親・友人・教師ともに高群	190	2.61	6.08	2.76* (7,640)	①②>⑧
	②教師のみ低群	51	2.73	6.42		
	③友人のみ低群	66	2.55	6.04		
	④親のみ低群	42	2.56	6.80		
	⑤親のみ高群	47	2.56	5.89		
	⑥友人のみ高群	26	2.67	7.70		
	⑦教師のみ高群	84	2.55	6.04		
	⑧親・友人・教師ともに低群	142	2.42	5.59		
職業の未来展望	①親・友人・教師ともに高群	193	2.76	6.90	6.38** (7,654)	①>⑦⑧
	②教師のみ低群	52	2.79	6.73		②③>⑧
	③友人のみ低群	71	2.67	7.03		
	④親のみ低群	44	2.69	7.50		
	⑤親のみ高群	49	2.53	7.68		
	⑥友人のみ高群	26	2.53	7.50		
	⑦教師のみ高群	83	2.50	7.15		
	⑧親・友人・教師ともに低群	144	2.40	6.06		
希望	①親・友人・教師ともに高群	203	3.35	2.55	31.23** (7,690)	①>③④⑥⑦⑧
	②教師のみ低群	56	3.30	3.01		②>④⑥⑦⑧
	③友人のみ低群	73	3.11	3.23		③>⑦⑧
	④親のみ低群	44	3.00	3.18		④>⑧
	⑤親のみ高群	49	3.14	2.65		⑤>⑦⑧
	⑥友人のみ高群	27	3.21	3.03		
	⑦教師のみ高群	88	2.82	3.16		
	⑧親・友人・教師ともに低群	158	2.64	3.30		
時間的展望	①親・友人・教師ともに高群	203	2.95	3.00	27.19** (7,692)	①>③④⑤⑥⑦⑧
	②教師のみ低群	57	2.81	2.65		②>⑦⑧
	③友人のみ低群	74	2.71	2.85		③④⑤⑦>⑧
	④親のみ低群	45	2.62	3.65		
	⑤親のみ高群	49	2.62	2.73		
	⑥友人のみ高群	28	2.58	3.31		
	⑦教師のみ高群	89	2.59	2.91		
	⑧親・友人・教師ともに低群	155	2.35	2.93		

* $p < .01$, ** $p < .001$

く、続いて「友人からの被受容感」、そして「教師からの被受容感」という順であった。また、親と友人からの被受容感、男子よりも女子の方が高かった。そして、「被受容感（全体）」は2年生より1年生・3年生の方が高く、「親からの被受容感」は2年生・3年生より1年生の方が高かった。また、「友人からの被受容感」・「教師からの被受容感」は、2年生より3年生の方が高かった。白井・橋川（2007）は、自分は頼りにされている、自分も周りの役に立っている、皆から認められているなど、他者と交流することで生まれる感情である「自己有用感」が、女子よりも男子が低く、そして2年生において最も低下することを示唆しており、本研究でも同様の結果が得られた。以上のことから、中学生は重要な他者からの被受容感のある程度感じており、その中でも一番身近な親からの被受容感を強く感じているということが明らかになった。そして、学年が上がるにつれて、被受容感を感じる対象が、親から友人や教師に移行していくことが示唆された。

未来展望と被受容感の関連 「未来展望（全体）」においては、「教師のみ高群」「親・友人・教師ともに低群」よりも「親・友人・教師ともに高群」の方が、また「親・友人・教師ともに低群」よりも「教師のみ低群」「友人のみ低群」「親のみ低群」の方が、有意に「未来展望（全体）」が高かった。また、「親・友人・教師ともに高群」と「教師のみ低群」「友人のみ低群」「親のみ低群」の間には有意差はみられず、対象にかかわらず二者以上からの被受容感が高ければ「未来展望（全体）」を描きやすいことが明らかになった。つまり、親・友人・教師のうち、一者からの被受容感を感じられなくても、他の二者からの被受容感を感じることであれば、未来展望（全体）をもつことができ、たとえば、親からの被受容感が低くても、友人と教師からの被受容感が高ければ、「未来展望（全体）」を描くことができることが示唆された。Trommsdrff（1983）は、親のあたたかさや子どもの未来展望との関連を検討し、親をあたたかいと知覚している子どもはそうでない子どもよりも、未来が明るく、自分の力で未来を統制できると信じていることを見出している（比嘉・岡本, 2007）。また比嘉・岡本（2007）は、未来展望の形成には親子関係のみでなく、その他

の他者との関係も重要な役割を果たしていることを明らかにし、未来展望の形成には、将来のモデルとなる重要な他者と出会うことのみではなく、それを契機として自分自身の洞察も深まり、その他者との関係に自分なりの意味づけを行っていくことが重要であると示唆している。親との関係においては、過去・現在・未来という時間の流れの中で関わりをもち、生活や時間の共有、愛情の獲得、喜びや悩みの共感などを通して、友人関係においては、自分の悩みや考えの共有、自分というものを確認しあう大切な人間同士の関わりあいを通して、教師との関係においては、教師を受容的かつ親和的であると感ずるほど、教師を一つのモデルとして同一視する（三浦・村瀬・西村・近藤, 2002）ことを通して、これら三者からの被受容感が未来展望を高めていると考えられる。そして、これら二者以上からの被受容感を感じるものが重要であり、未来展望に影響を与えていることが示唆された。このようなことから、教育現場においては、特に親または友人からの被受容感が低い生徒に対して、教師からの被受容体験を増やしていくことが未来展望を高めていくことに繋がるのではないかと考えられる。

「中学卒業後の未来展望」と被受容感の関連については、「未来展望（全体）」と同じ結果が得られたため、同様のことがいえる。特に中学卒業後は中学生にとって最も身近な未来であることから、親からの被受容感はもちろん、現時点で深い関わりをもっている友人・教師からの被受容感の影響も大きいことが考えられる。教育現場においては、特に周囲からの被受容経験が少ない生徒に対して、直接中学卒業後の進路指導を行っている教師が積極的に関わり、被受容経験を増やすことによって、中学卒業後の進路について展望をもちやすくなることが示唆される。さらに、西山（1995）は、教師と生徒が表面的にみえるつき合いであっても、直接・間接的に子どもたちが教師から影響を受けていることを指摘しており、中学生の未来に影響を与えるような進路指導が必要とされていることが示唆された。

「高校卒業後の未来展望」は、「親・友人・教師ともに低群」よりも「親・友人・教師ともに高群」「教師のみ低群」の方が、有意に得点が高かった。つまり、高校卒業後の未来展望において

は、教師の影響はあまりみられず、親や友人からの影響が大きかった。新見・前田 (2008) は、友人や家族と話をする生徒ほどキャリア意識が高いことを明らかにしており、家族や友人とのコミュニケーションが職業選択の基盤となる能力・態度・知識等の自己評価、すなわちキャリア意識の発達に寄与する可能性を示唆している。さらに金子 (2003) は、青年期における明るい将来展望は積極的な友達支援と関連していることを明らかにしており、友人からの被受容感が、進路について考える際には強い影響を与えていくことを示唆している。

「職業の未来展望」は、「教師のみ高群」「親・友人・教師ともに低群」よりも「親・友人・教師ともに高群」の方が、また「親・友人・教師ともに低群」よりも「教師のみ低群」「友人のみ低群」の方が、有意に高かった。つまり、「職業の未来展望」においては、教師からの被受容感よりも親や友人からの被受容感の影響が大きいこと、さらに親からの被受容感を基盤とした上での友人または教師からの被受容感の影響が大きいことが考えられ、親からの被受容感の重要性が示唆された。

「希望」は、「親のみ高群」が「親・友人・教師ともに高群」「教師のみ低群」と有意差がなく、「教師のみ高群」「親・友人・教師ともに低群」より有意に高かった。また「親のみ低群」は「親・友人・教師ともに高群」「教師のみ低群」より有意に低かった。つまり、「希望」の未来展望に対して親の影響が大きいことが示唆された。都築 (2004) は「このような人になりたい」という人間の存在が青年の希望の形成に寄与すると指摘しており、身近なモデルとして親や友人、教師といった存在が「希望」に影響を与えていると考えられる。

「時間的展望」は、「親・友人・教師ともに高群」の方が、「友人のみ低群」「親のみ低群」「親のみ高群」「友人のみ高群」「教師のみ高群」「親・友人・教師ともに低群」よりも有意に高く、親・友人・教師からの被受容感の影響が大きいことが示唆された。時間的展望に関して、谷 (1998) は基本的信頼感がそれまでの自己の連続性の感覚と密接に関わっていることを示唆しており、成長と共に親以外の重要な他者からの信頼感およびその背景にあると考えられる被受容感が影

響を与えているのではないかと考えられる。

今後の課題

まず、未来展望尺度の妥当性を検討する必要がある。また、小学生や高校生・大学生に対しても同様の調査を行い発達的な検討をすること、そして、未来展望の背景にあると考えられる他の要因についても検討することが必要である。

引用文献

- 天貝由美子 (1999). 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす要因. 教育心理学研究, 47 (2), 229-238.
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. *psychological Issues*, 1, 1-117 (小此木啓吾訳 (1982) 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—. 誠信書房)
- 比嘉麻美子・岡本祐子 (2007). 信頼感を基盤とした青年の未来展望形成プロセス. 広島大学心理学研究, 7, 227-243.
- 神谷孝男 (1982). 中学生のキャリア発達に関する調査研究 (1) —高校進学希望者の将来の職業その他の進路 (高校・科) に対する態度—愛知教育大学研究報告, 31, 211-229.
- 金子劭榮 (2003). 現代青年の意識構造の分析 友人関係と将来展望を中心に. 金沢大学教育学部紀要 (教育科学編), 52, 63-80.
- 松井賢二・奈良井啓子 (2001). 中学生の学校適応と進路 (キャリア) 成熟. 進路選択に対する自己効力との関係. 新潟大学教育学部紀要, 3 (2), 363-373.
- 三浦香苗・村瀬嘉代子・西村克彦・近藤邦夫 (2002). 教員のためのテキストシリーズ第2巻 発達と学習の支援. 新曜社.
- 望月葉子・斉藤耕二 (1992). 青年の将来展望に関する考察: キャリア行動をめぐる発達のアプローチ. 東京学芸大学紀要第1部門, 教育科学, 43, 89-98.
- 文部科学省 (2003). 中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局.
- 新見直子・前田健一 (2008). 中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション

- ン内容の関連. 広島大学心理学研究, 8, 67-75.
- 西山香織 (1995). 思春期における「自己肯定感」に関する研究—中学生・高校生を対象に—. 立命館教育科学研究, 5, 17-33.
- 坂柳恒夫 (1992). 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 16, 299-308.
- 清水和秋 (1990). 進路不決断尺度の構成—中学生について—. 関西大学社会学部紀要, 22, 63-81.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65 (1), 54-60.
- 白井利明 (2001). 希望の心理学—時間的展望をどうもつか—. 講談社.
- 杉山 成 (1996). 時間的展望の関連要因に関する研究の動向. 立教大学紀要, 38, 39-52.
- 杉山 崇 (2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究. 心理臨床学研究, 19 (6), 589-597.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2008). 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討. 筑波大学心理学研究, 36, 97-104.
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望. 発達心理学研究, 9 (1), 35-44.
- 飛永佳代 (2007). 思春期・青年期における未来展望の様相の発達の検討—「希望」と「展望」という視点から—. 九州大学心理学研究, 8, 168-173.
- Trommsdorff, G. (1983). Future orientation and socialization *International journal of psychology*, 18, 381-406.
- 都筑 学 (2004). 希望の心理学. ミネルヴァ書房.
- 臼井茉莉・橘川真彦 (2007). 中学生における規範意識とそれに影響を及ぼす要因. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 30, 165-173.
- 財団法人財団法人日本青少年研究所 (2001). 新千年生活と意識に関する調査. 日本・韓国・アメリカ・フランス国際比較.
- 財団法人財団法人日本青少年研究所 (2002). 高校生の未来意識に対する調査.
- Zaleski, Z. (1996). "Future anxiety: Concept, measurement and preliminary research" *Personality and Individual Differences*, 21, 165-174.

(やまほか ゆき 昭和女子大学生生活心理研究所)

(しまたに まきこ 昭和女子大学大学院生活機構研究科)

